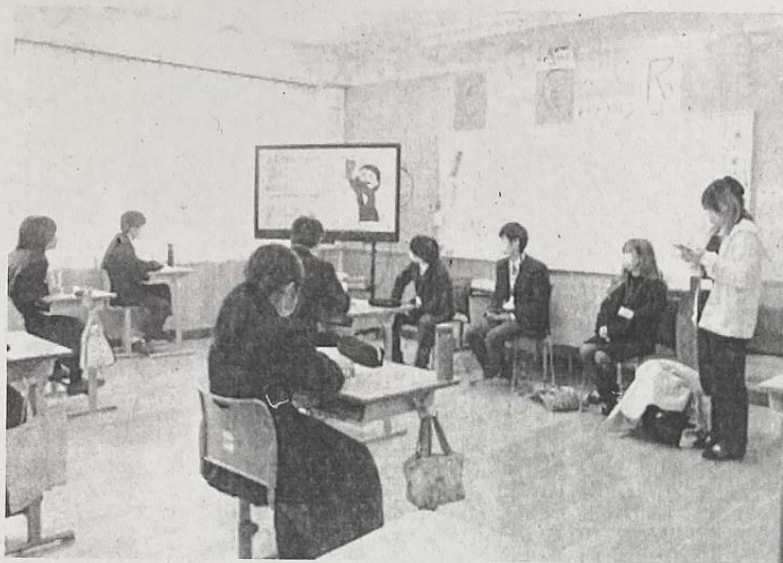


# 同じ敷地内の高校と支援学校で交流

阪神昆陽（兵庫県）



高校生のアルバイトの話聞く特別支援学校の生徒＝同校提供

同じ敷地の中にある、兵庫県立阪神昆陽高校と阪神昆陽特別支援学校。両校では立地を生かし、授業や学校行事などさまざまな場面で障害のある生徒とない生徒が互いに交流し合っている。

## 両校の教務部長推進委で話し合い

高校と特別支援学校という校長を兼務し、特別支援学校の方には副校長が1人、交流及び共同学習を進め

### 4形態の「交流」で共に学ぶ

障害のある生徒とない生徒が共に学ぶ「交流及び共同学習」は、四つの形でそれぞれ学習を進めている。

Aタイプは1年生が対象。音楽や美術、体育、情報といった実技・実習系の教科で週1回、年間を通して実施。両校の教員で打ち合わせしながら指導している。

2・3年生の希望者が対象のタイプBでは特別支援学校の生徒が週に1、2回高校の選択科目の授業に交ざって学ぶ。

公共や化学基礎などの教科の授業にも特別支援学校の生徒が参加している。高校の生徒は不登校経験者が多く、授業の内容は中学校までの学び直しを中心。特別支援学校の生徒も授業の進度についていけていないという。基本的に高校の教員が指導するが、特別支援学校の教員も仕事の合間に授業に顔を出して両校の生徒の支援に当たるところもある。

る体制として両校の教務部長が話し合う「交流及び共同学習推進委員会」を設置している。高校には困り感がある生徒を対象に通級指導教室があり、指導には高校の通級指導担当教員が当たっている。特別支援学校の特別支援教育コーディネーターもサポートに入っているなど、全校を挙げて特別支援教育に取り組む。

業教育やソーシャルスキルトレーニングなどの活動に年数回、「キャリアアプランニング」を受講している生徒が参加している。

タイプDでは近隣の高校の施設を活用して、両校の生徒と近隣の学校の計3校の生徒が交流学習をしている。コロナ禍前には保育園で紙芝居やポッチャもしていたという。

中でも「対人援助」という科目では「移動支援従事者」の資格を取得できたため、特別支援学校の生徒からは人気が高いという。Bタイプを希望しない特別支援学校の生徒はその時間、特別支援学校の方で授業を受けている。

タイプCでは、高校の生徒が特別支援学校の授業を受ける。特別支援学校の職

### 教員の負担軽減を図る

多くの場面で交流が多い両校だが、開校から数年後には交流が下火になっていった時期があったという。交流するには教員間の打ち合わせに多くの時間がかかっていた。大きな負担になっていたため、開校から時間がたち、忙しさから交流することを生徒に勧める空気が薄れ、令和2年度にはタイプBで受講する特別支援学校の生徒は20人にも満たなくなっていたという。そこで、令和3年度からタイプBの授業の曜日と時間を固定し、負担軽減を図ることで、本年度には50人近くにまで増加した。

### 相互理解も促進

両校とも、交流することをお互いに受け止めている。文科省は来年度以降モデル事業を実施する予定だ。

特別支援学校と小・中、高校が連携する取り組みは国も進めている。

昨年度、文科省で開かれた「通常の学級に在籍する障害のある児童生徒への支援の在り方に関する検討会議」では兵庫県教委の担当者が同校の取り組みを報告し、3月に公表された検討会議報告には特別支援学校を含めた2校以上の学校を一体的に運営する「インクルーシブな学校運営モデル」の創設などが盛り込まれた。

運営モデルでは必ずしも敷地が同じである必要はないが、「学びの場の連続性を高める取り組みが必要」としている。文科省は来年度以降モデル事業を実施する予定だ。